

# ダニ

## 部落共同で駆除しましょう

ダニといえば聞いただけでもゾットする言葉だ。それだけに私達の悪の観念に通じているし実際に悪いことばかりである。そのために色々の形容に使われ、例えば町のダニ一掃とか、ダニのような奴とかいうように、これらはダニはしばしば新聞の社会面を賑やかしている。

善人や動物につくダニのように血を吸いとっているのではなく、ダニのようにたかつかえって吸われているのが町に氾濫したパチンコの産んだ風物詩であろう。ともかく町のダニ社会から、動植物のダニは自然界から追放しなければならない。

ダニという字は普通に蟻、壁蝨とか幾つかの字があり、動物学からの分類はクモ（蜘蛛）の属に入っている。何んでも3,000種以上もあるということだ。

### ダニは家畜の大敵といえる

ダニが畜産のうえに重要視されているのは、放牧している牛や馬に100%寄生して種々の障害を起させるからだ。それは家畜の体に寄生し、刺したとき毒性物せ体内から分泌して局所が腫れ、いたみやかゆみをもよおすなどの不快感や血を吸うことによって起る貧血や栄養不良である。特に問題となることは種々の病原体を媒介するなど眼に見えないところの悪いことをする。なかでも牛の体の中に寄生しているピロプラズマ原虫という住血虫はダニによって伝ばして行く代表的なもので、赤血球の中に入りこんで血球を破壊する。牛はダニによって血液を吸いとられることと、このピロプラズマ原虫によってますます貧血や栄養不良を起させることになる。そこでダニを駆除することはピロプラズマ病の予防ともなるわけである。

### ピロプラズマ病とは

前に述べたようにダニにより伝ばして行き、血球を破壊するもので急性・慢性の病気を起す。別名ダニ熱ともいう。私達が県北部のある放牧場で牛を検査した

ところ97%も寄生していた。仔牛に被害が多く発育を止める。貧血は外観上見ぬくいので注意をする必要がある。

このようにダニによる被害は沢山あるが、この被害を軽く見ているものか或は永年のダニに慢性になっていて寄生することが運命とあきらめているものか、駆除方法を知らないのかとつくづく思うのである。あの小さいノミとわれわれ人間のたたかいをみて下さい。牛だからダニの吸うにまかすという理由はなりたないと思う。

かつて本県の牛に寄生するダニの種類を調査したことがあるがこれによると3属5種ぐらいみつかったことを記憶している。なかでも最も多いものはマダニ類でフタトゲマダニという種類である。県北部の山間にある放牧地はいうまでもなく、少くとも牛が常に放牧されているところには必ず見受けられる。それ程分布が広く、それだけにその被害も大きいといわなければならない。

本県に多いフタトゲマダニは6月頃と9月に一番多く発生するようだ。それに古い放牧地ほど多い傾向があつて、放牧地方のお百姓は「ダニは牛の糞からわく」といわれているが、それはあやまりで、古い糞塊の下にそれこそ無数に小さいダニが集まっていることは事実だ。（ダニは集団化する習性がある。）勿論、牛の体にもそれこそ無数に寄生している。これを見たとなんにゾットして自分の体がむずかゆくなるほどだ。

### ダニの一生

ダニは面白い生活を営んでいる。ここではフタトゲマダニの一生について簡単に書いてみましょう。

卵から3本の脚をもった幼ダニがふ化（卵からふ化するまで約20日間）し、赤褐色の0.5ミリメートルぐらいの非常に小さいもので約15日で活発な運動を始め、草葉の先端に集まって脚を2本あげて活動し、

## 岡山畜産便り1959.06

牛につく機会を待っている。この幼ダニが牛に寄生する期間は3日～6日間で、その間に血液を吸い満腹となると自然に牛の体より離れ落ちそして地上の落葉の中で脱皮（第1回）をする。ふ化して第1回目の脱皮を終るまで大体1ヶ月と見られている。第1回の脱皮がおわると今度は脚が1本増えて4本となり、幼ダニと同じように草葉の先端に集団して牛にくっつくのを待っている。2回目の待機をしているわけである。これを若ダニという。

若ダニが牛に寄生し血を吸うのは4日～7日間で、血を吸い満腹すると又地上に離れ落ちて第2回の脱皮をする。これを成ダニという。成ダニも草葉の先端に集まって牛につく機会をねらっているもので第3回目の寄生を待っているわけである。たとえ牛に寄生しなくとも自然界では2～3年間は生きることが知られているから生活力は旺盛ということが出来る。

この1.5ミリ位のダニが血を一杯に吸うとエンドウ豆ぐらい大きく丸く黒くなって行く。6日～10日で充分血を吸いその間に牛の体で交尾し、受胎した雌は三たび地上に落ちて落葉や砂の間などの少し湿気の多いところで卵を産むようになる。私達が実験したものによると、7日～10日間毎日200～300個の黒褐色の小さい卵を静止して産み、腹が小さくなって死んで行く。1匹のダニから1,500～3,000個の産卵があり、これが殆んど全部ふ化する。

このように地上で幼ダニ、若ダニ、成ダニと自由な生活を3回と、牛に寄生するときが3回と脱皮が2回することになる。この間に成ダニで越冬するもの、若ダニで越冬するものがあるが、成ダニで越冬するものは翌春に産卵する。若ダニで越冬するものは春に成ダニとなり6月頃産卵し、このものはすべて秋になって再び成ダニとなり越冬する、このために成ダニは春と秋の2回に現れてくるということになる。このようになかなか生活史は複雑で3回牛に寄生するダニを3宿主性といい、2宿主性、1宿主性などが知られている。このように面白い生活を営んで一生を終ることになるが、その生涯のうちで副産物として色々の病原体を媒介伝ばするのである。

フタトゲマダニは幼ダニ、若ダニのときピロプラズマ原虫を吸い、次の若ダニ及び成ダニのときに伝ばさすといわれている。

## ダニ駆除の効果

いまでも「ダニのついていない、ついたあとかたのないよう牛は牛でない」といわれているが、この根拠は多分放牧した牛でなければならないことを強調したものであろう。しかし、B・H・Cなどのように駆除薬がある現在では時代錯誤も甚しいといわなければならない。

県北部の奥津家畜保健衛生所管内では職員指導のもとに部落共同でダニ追放のために努力し、その放牧場で育った仔牛は昨年1頭平均2,500円から高く売れたということである。

奥津家畜保健衛生所からの報告を要約してみると

- 一. 駆除した全部の牛が非常に元気で色艶もよく、駆除しなかった他の牧場の牛に比較にならない。
- 二. 目に見えて肥ってきた。
- 三. 殆んどの牛が放牧牛に見られないほど温順となった。
- 四. 放牧中見逃す発情や異常牛を早期発見ができ、繁殖がスムーズとなった。
- 五. ダニ以外の昆虫類（あぶ）の付着が目立って少くなった。
- 六. 放牧場内を歩く人に付着するダニが減ってきた。
- 七. 永年のダニの悩みが解消し、光明を見出した。

なお特に強調することは、部落間の畜主の親和、団結が図られた。これはダニ駆除事業による一方の精神的な大きい成果であるという。

ダニの生態についての報告は、(昭和33年)

- 一. 6月上中旬は成幼、若ダニが多い。
- 二. 6月下旬から7月上旬は成ダニが少い。
- 三. 7月下旬は成ダニが多く幼、若ダニが少い。
- 四. 8月下旬、9月上旬殆んど成ダニが見られず幼、若ダニが多い。

ダニの駆除方法は簡単であるが、部落民の団結が必要である。

一般に行われている駆除方法は、放牧場に5日～7日毎に1ヶ所に集合させ、柵場の中に入れて3% B・H・C粉末か、5%の水和剤を使用する。

## 岡山畜産便り1959.06

粉末の場合はそのままガーゼに包み牛の全身に撒布（約50g）する。水和剤の場合は100～400倍に水で稀釈して噴霧器で撒布する。今までずぶ濡れになるまで撒布しても薬害は見受けられないから安心して使用してよい。

牛体に撒布をすることは消極的な駆除方法であるが、今のところ地表面にいる幼、若、成ダニ、卵を駆除する適当な方法が見当たらない。

B・H・Cは効力が早くなるので5日～7日間、欲をいえば5日毎に撒布することが一番よい方法だが、6月から10月まで実施することになるとやはり手間がかかり過ぎる欠点があるので、この欠点をカバーするためにここに忍耐と団結が要請されるわけである。

奥津地方では当番制にしているということだ。

山焼きはダニの駆除に効果があるか。

放牧場を山焼きする習慣があるが、これはある程度の効果しか認められないようだ。山焼きする頃はダニは枯葉や枯草の堆積中の中に、いわば土の中に潜んでいるので火が表面だけにおわりかえって植生を悪くする方が多いとまでいわれている。また反対に山焼きをやらなかったために翌年すごくダニが増加したという例もきいているが、ともかく、山焼きはそれ程の効果がないといわれている。そのためにはどうしても薬剤散布することがよいことになる。

この薬剤散布という困難な事業を部落共同で行い今までの放牧牛の宿命であるダニの寄生追放に向ってたたかわねば何時までたっても被害からのがれることはできません。

## 今後のダニ駆除の研究課題

ダニの生態をよりよく研究することは勿論のことB・H・Cより薬の効果が持続する薬剤と見出すこと。広く分布するので、寄生前に数ヶ所に誘引して一度に殺す方法、天敵の利用、カビの利用、ダニが嫌う植生を見出すこと、ダニが嫌う薬を見出すことなど今後の研究として望むものである。